

---

# ALNO (アルノ)

くれいじい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルノ  
ALNO

### 【コード】

N7972Q

### 【作者名】

くれいじい

### 【あらすじ】

俺の名はラディ・アルノ。唐突だが、ちょっと自分語りがしたくなかった。

俺は黒い髪に黒い瞳のどっから見てもアジア人だが、小さい頃に親に捨てられ、異国の地で育ってきた。

そんな俺が生きる”現在“…おそらくこれを見ている君にとっては“未来”になるのだろうか…そこでは、世界を舞台にいろいろと大変な事が起きている。

ここではその中で俺が果たさなくてはならなかったタフな仕事について話そう。

じゃあ、しばしの間お付き合い願えるかな？

## 飛行機の中（前書き）

初めまして、くれないじいです。

「社会とは何ぞや」「などとヒマな事を考えつつ、ゆるりと書いていきます。

目を通してくれれば嬉しいです。

## 飛行機の中

機体が揺れて、俺は目を覚ました。

小さな窓の外では、空が暗くなり、雨が降っていた。

ふと機内の前の方を見ると、電光掲示板に“シートベルト着用”のサインが出ている。

離陸直後から耳を悩ませていた飛行音は、耳が適応したのか注意しないとわからなくなっていた。

俺は自分の腹と肩を締め付けるベルトの存在を確認した後、中央の通路を挟んで反対側の席へ目を向けた。

「何だか、荒れているようですね。隊長」

「…そうね」

反対側の席に座った女性：“隊長”が、素っ気なく答えた。

「でももう雲の下だから、じきに着陸するようね」

上品な英語を流れるように発音する隊長は、一回りもふた回りも年齢の若い俺から見ても美しいと思った。

「…スリッパとか、しませんかね？」

「あら、怖いのか？」

ふふつと笑いながら、隊長は冗談めかして聞いた。

俺はまた窓の方を向いた。

「…苦手なんですよ。飛行機」

「それは、前にあなたが言ってた…トラウマってヤツかしら?」

「…そんなところです」

「そのトラウマ…私に話してくれる気はないのかしら?」

「……………ない、ですね」

俺は目を閉じた。

また眠りに落ちればいいと思った。

着陸する瞬間を、起きて感じていたくはない。

そう、俺は飛行機が苦手だった。

今乗っているこの飛行機はとある北欧の国からアジアへと向かうチャーター便。

俺の名はラディ・アルノ。

まだ生まれて間もない頃に、これとは逆のルートを辿る非正規便：要するに“密輸便”に乗った事がある。

自分の周囲で何が起きているのか全くわからず、ただ印象に残っているのは機内の油で汚れた天井の光景…。

そうして俺は、19年前：実の親に、捨てられた。

俺がこの事を知ったのが、捨てられた国で小学校に上がった時だった。

以前から不可解な記憶に悩まされていた上、クラスの中でなぜ自分だけが黒髪に黄色い肌なのか疑問を抑えきれず、育ててくれた養父に質問したのだった。

当時教会の神父だった養父は、出来るだけ俺が傷つかないように、言葉を選びながら真実を教えてくれた。

お前の母には、お前を育てるだけの力が無かった。仕方がなかったのだと…。

それならなぜ国内ではなく、異国の地に子供を捨てたのか。

それを教えてくれなかったのは、俺が当時まだ幼すぎたからなのだろうか。

…何はともあれ時は過ぎ、俺はもう19歳。

俺が生まれてからの19年は、様々な物が変化する、まさに激動の時代とともにあつた。

今俺は、その大きな要因となつたある組織の中で働いている。

飛行機の中（後書き）

ラーメンにドライアイス入れたら凍った。

くれいじい

## W W U

組織は、その名を全世界連合政府という。

通称W W U (Whole World Unite)。

かつて国際連合と呼ばれた組織が前身で、より強く幅広い権限を持っている。

例えば、加盟国の最高施政権はその国の政府ではなく、W W Uが持つ事になっている。

つまり、ある国の政府方針とW W Uの方針が食い違えば、W W Uの方針が優先されるという事。

また、さらに大きい特徴が、W W Uに加盟している国同士は事実上同じ国として扱われるという事だ。

加盟国間の人の移動は自由。いかなる交易にも関税などの保護政策は禁止。等々。

つまり、W W Uに国家が加盟するという事は、W W Uにより国家が統合されると言い換える事ができる。

数十年前に突如発足したW W Uは、驚くべきスピードで世界の主要な国々を統合していった。

W W Uが国家を統合する目的には、国家間紛争の防止や貧困の撲滅が挙げられる。

国同士を一つにしてしまえば、利害の対立もなくなり紛争も起きなくなる。

そして国々をまとめて人口調整を行えば、貧困をなくす事も不可能ではない。

混沌としていた世界情勢の中で、WWUの登場はまさに奇跡と言われた…。

しかしそんなWWUにも、問題となる点があった。

WWUに関して、誰もがまず疑問に思う事。

「施政権を奪われてしまったり、保護貿易が認められなかったり、いろいろと損ばかりするのにどうして国は加盟するの？」

至極簡単な事だ。

加盟したのではなく、させられたのだ。

WWUという組織の発足を最初に提唱した国は、当時世界で最も国力が大きく、影響力のある国だった。

そしていくつかの関係の深い同盟国に、「WWUに加盟しなければすべての貿易と安全保障を打ち切る」と、一方的に宣告した。

当然宣告を受けた国々では大騒ぎになったが、不況で政情が不安定

だった事もあり、賛成反対と散々世論が揺れた後結局どれも加盟する事を決めた。

そうして世界の主要な国がW W Uに統合されてからは、早いものだった。

加盟国の軍備を使って紛争地へ軍事介入し、結局紛争国双方を統合。国に調査団を派遣し、言いがかりをつけて経済封鎖や武力制裁の後統合。

当然あちこちで非難の声が上がったが、圧倒的な力の差故に直接発言できる国はどこにもなかった。

さつきも言った通り、俺はこの組織…W W Uで働く職員だ。

全世界連合政府国際調査隊という部署で、国際査察官の任に就いている。

自分たちの“正義”に若干の疑いを抱きながら、それでも毎日の忙しさに流されつつ仕事をしていた時、俺は久々の海外任務に就いた。もうW W Uは、世界のほぼ全ての国を何らかの形で管理下においてしまっているが、たった一つ、主要国の中で統合できていない国がある。

それは、俺の因縁の国。

すなわち、俺を捨てた母親の故郷だ。

W W Uが統合されていない国をそのまま放置するはずもなく、実際  
今、その国にW W Uの査察団が送られようとしていた。

査察団とは、W W U国際調査隊から派遣されるチーム。

…そう。今まさにチャーター便でその国に向かっている俺たちの事  
だ。

## W W U (後書き)

家でゴキブリが出ると怖くて逃げちゃう事もあるけど、部室でゴキブリが出たらみんなでシーブリーズかけたりして遊んでる。仲間がいるから、人って強くなれるんだなあ。

くれいじい

## 通り雨

幸い、俺が目を覚ました時には既に窓の外は地上で、雨は止んでいた。

小さなチャーター便から正装した男女が列を為して出ようとしていた。

殆どの者が一律に体格が良く、そうでない者はたいてい射抜くような鋭い眼光を備えていた。

俺も頭上の荷物入れからショルダーバッグを取り出すと、列の後に続いた。

窓から、タラップを降りる隊長の姿が見えた。

降りる時に起こしてくれれば良いのと思ったが、そこを起こさない所もあの人らしかつた。

「ほう、俺たちや今アジアにいるのかい」

飛行機から降りる列に並んだ大柄な白人エージェントが、隣の一回り細いこちらも白人の男に話しかけた。

ガムを噛む音がニチャニチャとうるさい。

「ハハッ。高度成長とやらの夢から覚めた黄色いサル共の面を見るのが楽しみだなあ」

二人は顔を見合わせて下品に笑った。

あまりに耳障りな笑い声に、周りの者が皆彼らの方を見た。

大柄な方の男が、にやにやしなから俺の方をちらりと見た。

「なあ、アルノ。お前のその黄色い顔、まさかアジア人の血じゃねえよな？」

「なわけねーだろ」

クスクス笑いながら細い方の男が言った。

「アジア人が“この国”への査察になんか来るもんか。大方、日焼けサロンに行って中途半端に焼いた拳銃、髪の毛だけ黒焦げにしちまったんだろ？なあ？」

また二人は大笑いした。

俺は黙って、カバンを肩から下げると混雑した機内をうまくすり抜けながら列の後ろに加わった。

すれ違いざまに大柄な方の男の足を踏みつける。

「いてっ！おい、てめえっ！」

男は憤慨して俺に近寄ろうとしたが、大きな身体で列の流れに逆らう事は、周りの人間が許さないだろう。

皆が俺の方もちらちらと見ている事に気付いたが、俺は胸に上った

複雑な気分を消化するのに忙しかった。

俺は列の最後尾に立つと、窓から外を眺めた。

空港の広い離発着所の向こう側に、微かに都市の灯りが見える。

時計を見ると、もう深夜を回っていた。

列の前の方からまだ罵倒するような怒声が聞こえてきていたが、もう気にするのも馬鹿らしかった。

WWUの目標の一つ、“世界の完全なる恒久平和こくきゅうへいわの実現”。

そんな目標を掲げる連合政府の内部の人間が平気で差別発言をする時点で、“恒久平和”なんてただの欺瞞としか思えない。

そんな連合政府のまるで侵略行為のような他国統合に加担している俺の生き方が誠実かと問われたら、無論答えはノーなのだが。

通り雨(後書き)

逆転検事2 買いに行きたい。

くれいじい

## 隊長

列に従って空港の建物に入った。

係員に旅券を見せ、必要な手続きを済ませて“この国”の中に入国する。

そこではW W U査察官が全員、役目ごとに整列していた。

総勢40名程。

大量の黒服が並んでいるこの光景を見て、空港の他の利用者は社員旅行か何かだとも思うだろうか。

今回のW W U査察は一般に対しては秘密裏に行われる調査なので、あまり大っぴらになってはいけない筈だが：まあ、見ただけで国際査察官云々なんて考える程想像力豊かな人もそうそういないだろう。

入り口からみて一番左端は、政府資金の用途や、汚職がないかなどを調査する役目のようで、いかにも頭脳派といった風体の者が並んでいる。

逆にそこから何列かを挟んで一番右端の列の者は、一目見ただけで何か物騒な事に携わる連中だとわかる程、いかつい体格とガラの悪い風貌を兼ね備えていた。

俺が自分が加わるべき列を探していると、右端の列からさつき足を踏んでやった大柄な白人の男が俺を発見し、肩をいからせて近づいてきた。

両の拳を組んで、指をボキボキ鳴らしている。

「おい、アルノ。さっきは左足がお世話になったな」

周りの人間は明らかに関わりたくないといった表情で目をそらしている。

俺はこちらを睨んでいる男の視線を捉え、挑戦的に睨み返した。

「…ナメんなよ。チビ」

男は至近距離まで近づいてくると、俺より頭一個程高い位置から見下ろして、なすりつけるように言った。

俺は目を合わせたまま、何も言わない。

「何とか、言えよっ！」

焦れた男は、声を荒らげた。

そして身体の動きから、俺はその拳が俺の顔面に向かって飛ばされようとしている事を悟った。

まったく、野蛮人はイラつくとすぐこれだ。

俺は身体を素早く回転させ、男の拳を左手で受け流すフリをしながら右手でしっかりと捉えた。

そのまま体重をかけて腕を伸ばし、両手を使って前腕を押しながら

手を引き込むと、いとも簡単に手首の関節が極まった。

「ぐおおおおっ!!」

男が悲鳴を上げたので手首を解放してやると、そのまま右手を押さえてうずくまった。

「キ…キサマ…ぶっ殺す……」

「それはこっちのセリフだ」

俺はうんざりしながら口を開いた。

「今度“黄色いサル”なんてほざいたら…一生手を使えなくするぞ」

いつの間にか、俺達の周りから人が引いていて、あたかも円のような広場ができていた。

そしてその円を横切りながらこちらへ向かってくる者が一人。

緊迫した場の空気を物ともせず、そのすらっとした容姿ようしからその人独特のオーラを放っていた。

「あなたたち…外国に来てそうそう喧嘩けんかなんて、いかななものかしらね」

「た、隊長……」

うずくまって悪態をついていた男は、立ち上がって弁明を始めた。

「メリー・ケール！俺は何もしてないのに、このバカがいきなり足を踏みつけやがっ」

「黙りなさい」

査察団のトップ、メリー・ケールW W U国際調査隊長は端正な顔に冷たい怒りを浮かべた。

さっき、飛行機の中で俺に見せた穏やかな表情など、もう面影もない。

「他の調査員達からもう事情は聞いています」

「え…？」

「特定の民族を侮辱するような発言など、W W Uの職員として許される行為ではありません。従って、今後3ヶ月にわたって、あなたを5割の減俸処分とします」

「1」、5割っ！？ちよつと待ってくれ、メリー隊長！おいつ！」

「異論は認めません。この話は以上です。皆さん。もう喧嘩は終わりましたから整列し直して下さい」

隊長の声で、円を作っていた人々が一齐に元の場所に戻った。

隊長（後書き）

朝のラッシュで電車の中で抱き合ってる奴ら、俺もそろそろキレるぞ。  
くねいじい

## 欺瞞

待っていた現地の職員に連れられ、査察官達は役目ごとに空港から姿を消して行った。

俺もその一員になろうとした時、隊長の声が聞こえた。

「ああ、ラディ・アルノ査察官はここに残りなさい」

「えっ？」

「あなたには急遽、別の仕事ができたのよ」

「ごめんなさいね、と言って微笑む隊長の様子は、もういつもの彼女に戻っていた。

俺を置いて全ての査察官がいなくなるのを待って、隊長は俺を別の方向へ連れて行った。

国際空港の数ある出入り口の一つを目指して、俺は隊長と空港内を歩く。

「さっきは、大人げない所をお見せしてしまい、すみませんでした」

俺の謝罪には反応を示さない隊長。

そのまま数歩が過ぎて、突如隊長は口を開いた。

「…欺瞞だ。そう思ったでしょ？」

コツコツとヒールの音を響かせながら、隊長は言った。

「……………」

「100年以上前に大戦が終わって…世界は平和になったように、誰もが理解し合えるような環境が出来たように思われた」

「…そうですね。一応は」

「でもやっぱり、人間だって、本質は他の動物とそう変わらないのよ。きつと」

「どつという意味ですか？」

「生まれた場所が違って、言葉が違って、文化も常識も違う。それでも仲良くできる程人間が社交的な生き物ならWWUなんて必要ないし、発足する機会も無かったんじゃないかしら？」

「それなら、なぜWWUなんて物が発足したんですか？」

「そうね…。発足当時の歴史は闇に包まれてるけど、要は誰かが得をする仕組みがあるのよ。きつとね」

「いくらなんでもそこまで斜めに見なくても…」

確かにWWUには問題もあるし、批判もされているが、その根本の理念はきつと正しいのだと思うだけに、俺は隊長の考え方を100%受け取る事はできなかった。

「斜めになんて見てないわ。いい？この世の中で最も信用できる物があるとするば、それは欲望よ。人間も含めて、どんな生き物も欲望には正直。…覚えておくといいわ」

たどり着いた出入口をくぐると辺りはすっかり暗く、夜風が少し冷たかった。

すぐ側に黒塗りの高級外車が停まっっていて、スーツを着た現地の男が起立して待っていた。

「W W U 国際調査隊長で、今回の査察団の指揮をいらっしやるメリー・ケール様でいらっしやいますね？」

「ええ。よろしくね」

隊長は微笑んだ。

男は俺の方を見て怪訝な表情を浮かべた。

「失礼ですが…そちらの方は？」

「私の部下なの。ラディ・アルノ査察官よ」

「これは失礼致しました。…では、お車へどうぞ」

俺と隊長は車の後部座席に滑り込んだ。

さっきの男は前のドアを開けて運転席に座り、助手席にはSPと思われる別の男が座っていた。

「急がなくてはならない。通行人が何人か見ている」

SPが唐突に口を開いた。

「やはり、目立ってしまうことを考えれば国賓用の公用車は避けるべきでございました」

運転手の男は手早くエンジンをかけ、夜の街を目指して車を発進させた。

欺瞞（後書き）

お腹へる 食べる 遊びたい P C 眠くなる 寝る 起きる お  
腹へる …

もつだめば

くれいじ

い

## 大統領

高級外車のランプが、雨に濡れた巨大な建物を照らし出していた。

大統領官邸・旧首相官邸に到着してすぐ、SPに囲まれて大統領との面会になった。

赤絨毯が敷かれた小奇麗な執務室の中に、背が高く、品の良さそうな出で立ちでその老紳士は立っていた。

人の良さそうな笑顔を浮かべたこの国の大統領は隊長と俺を見て、開口一番流暢な英語でこう言った。

「遠路はるばる、ご苦労様でした」

「大統領閣下と直接お会いできる機会を頂けるとは、身に余る光栄ですわ」

隊長も慇懃な礼でそれに応じた。

「…ところで、その方は？」

…来た。

運転手といいこの大統領といい、俺がいたらなにか困る事でもあるというのか。

「彼は査察官のラディ・アルノです。私がこの目で見て優秀と認めたい自慢の部下で、いずれは私の後を継がせたいと考えています」

「ほう。それは喜ばしい事ですね。W W Uの功績については、私もしばしば耳にする事があります。何でも、加盟国内の失業率を0・5%まで抑えたとか」

「ええ。我々W W Uは国家統合と同様に、加盟国の貧困問題の解消にも力を入れていますから」

「貧困が無いというのは良い事です。昔はこの国にも、世界トップの経済大国と言われて浮かれていた時代がありました。その頃はまだ大統領という役職もなく、議会内閣制・資本主義の政治体制でしたが」

俺は大統領のぼやきを聞きながら、事前の研修で知った、この国の政治体制移行の歴史を思い出してみた。

世界の国々は、各々様々な政治体制を取っている。

大統領制、議院内閣制、権力集中制、等々。

この国がかつて取っていたのが議院内閣制だ。

これは立法権（法律を制定する権利）を有する議会と、行政権（政策を実行する権利）を有する内閣・首相が分立して政治を取る制度で、世界の中ではかなり少数派の政治体制。

景気が良く、とりあえず働けば幸福が約束されていた時代はこの体制でもきちんと政治は機能したらしい。

だが、近代のいっこうに終わりの見えない不況や治安の悪化、そし

て外交問題の増加などにより、この国の政治が大きく揺さぶられた瞬間、政治はまったく機能しなくなった。

様々な立場の議員が好き放題に物を言い、同一政党内でも意見はバラバラ。あげくのはてに審議拒否に議会での乱闘。

不況を打開する政策はおろか、その年の予算を可決する事すら満足にできない。

そんな遅滞した政治状況の中、国民が感じたのはこの国の政治体制の限界だったという。

そうして数十年前、この国の憲法が改正され、内閣が廃止された上で政府に大統領という役職がもつけられた。

この大統領というのは、国民の中から全国投票で選出され、行政府の長として強い権力を持つ国家元首の事だ。

要するに、議員内閣制から大統領制へと移行したのである。

その大統領に、隊長が話を切り出した。

大きな自信をはらんだ声で相手を威圧する姿は、“獲物”を前にした隊長の常だ。

「現在WUは、貴国に年間米1000万トンを中心として様々な食料、そして貴国の国家予算の半分を援助しています」

大統領が目を細めた。

「感謝しています。何千万人という国民がWWUに救われています」  
「しかし残念な事に、WWUの援助額と貴国の提出した国家予算及び政府の支出報告の間に、ひどい矛盾があるのです」

「……………」

大統領のまとうオーラが、一瞬にして変化した。

表情は強ばり、眉間に皺が浮き出ている。

隊長は容赦なく、核心に踏み込んだ。

「連合政府に納められた加盟国民の血税から、WWUの援助金は捻出されています。もしそれが、貴国の申告内容とは別の用途に使用されているとしたら、由々しき問題です」

「……………」

大統領は何も答えなかった。

「また」

隊長は一步大統領に近づいた。

「とある調査機関の報告から、貴国が核兵器を開発しているという情報をWWUは掴みました」

隊長は、自分より背の高い大統領の顔をぐっと見上げると、そんなとんでもない事を言った。

大統領（後書き）

あれ、もう春になっちゃうの？

……今年度もモテ期来なかったな……

くれないじい

## ボーカーフェイス

その瞬間、大統領の眉がぴくりとだけ動いた。

俺は部屋の空気が変わったのを感じ、辺りを見回すと俺たちを取り囲むようにして立っていたSP達がただならぬ様子で顔を見合わせている。

「…メリー・ケール様、と言いましたな」

人当たりの良い印象は一瞬にして吹き飛び、今や威厳すら漂う重みをもったしわがれ声で大統領は言った。

隊長の発言をきっかけに、何かが決定的に変わったと俺は確信した。

「確かに、わが国はWWUから多くの支援を受けており、またWWUは今や世界の主要国を全て抱える大連合国家です。しかし、わが国も同時に一つの国家であり、私は国家元首。私には1億人のわが国民を守る義務がある。…そのような疑いをかけてわが国を非難するのであれば、正規の外交ルートから正式な手順を踏んでからにして頂きたい」

「私は、全世界連合政府から現在、貴国との外交に関して、ぜんけんい全権委任を受けております」

隊長が囁んで聞かせるようにゆっくり言った。

「つまり、大統領が仰る“正規の外交ルート”というものがあるとすれば、それは私です」

「……………」

大統領は口を閉ざしてしまった。

しかしその表情は動かない。

さすが政治家だけあり、ポーカーフェイスは得意なようだった。

「…この件に関してこの場で回答が得られないようであれば、後日またお伺いする事になりますが、その時まで私がW W Uの全権委任を帯び続けるとは思わない事です。内容が内容であるだけに、W W U A関係者が担当しなければならぬレベルだとも思われますので」

(…!)

隊長の発言が、またも部屋の空気を凍らせた。

俺自身も、発言の持つ意味の重さに思わず喉を鳴らしたくらいだ。

W W U A (Whole World Unite Army) …。  
全世界連合軍の略称。

世界のトップ軍事大国と言われる国々から軍備を割かせて、一つにまとめた今世界で最も強力な戦闘集団。

それがW W U Aである。

陸海空全てにおいて最新の兵器を備え、空軍は空だけに限らず地球周辺の宇宙空間までも自らの管制下に置いているという。

『W W U A関係者が担当しなければならぬ』この言葉はすなわち「言う事を聞かなければW W U Aの軍事制裁も辞さない」という事を意味する。

もう、完全なゆすりである。

そんな事をさらりと口にする隊長、年齢的には一回りしか変わらない彼女の度胸に俺は今更ながら格の違いをひしひしと感じた。

事実、隊長の顔には後悔の色は微塵も見えない。

大統領も気圧されてしまい、ポーカーフェイスを崩さないのが精一杯のようだった。

数秒考え、やがて口を開いた。

「…この国は、百数十年前に世界で初めて核兵器を投下されました…被爆国です。その被爆国において、わが国の国民自ら核兵器を作るなど…あり得ないと言いたいようがない」

「私どもは信頼できる情報筋からこの情報を得ました。もし核兵器を作っていないのであれば、私どもの調査員による貴国国軍施設の内部調査を許可して頂きたいですわ」

「国軍施設を調査する…ですと？」

俺は大統領…いや、この国が次第にカタに嵌められていく様をじっと眺めていた。

隊長が俺にこんなものを見せる意図がわからなかった。

これを通して、何か俺に伝えたいものでもあるのだろうか。

「貴国には拒否する事はできません。W W Uから貴国への物質的援助をする時に締結した条約の条項に、『W W Uから申し出があれば、いかなる時もあらゆる政府機関の情報開示ないし内部調査の許可を行う』事が明記されておりますので」

「ぬう…」

大統領のポーカークフェイスが崩れた。

代わりに口を真一文字に引き結び、鷹のような眼で隊長を強く睨みつけた。

今まで一度も見せなかった、まるで悪魔のような形相。

これがあの老紳士の素顔なのだろうか。

「まあ、我々も出来れば信じたくなどありません。貴国が年々悪化していく食料事情や雇用情勢などに目を向けず、W W Uからの支援金を使って新兵器開発に勤しんでいるなど。…ですが、仕方がないのです」

隊長が白々しく心にも無いであろう事を言う。

「調査の許可を下さいな…。もっとも、条約がありますから後日W W U Aを率いて強制調査、という選択肢もありますが…」

大統領はまたしばし黙考した。

この状況を切り抜ける方法でも考えているのか、まったく感情が読めない。

しかし結局、押し殺すような声で、「こう言うほかなかった。

」「調査を……許可……する……」

## ボーカーフェイス（後書き）

遅ればせながら逆転検事2クリア。

何だかレベル上がりましたね…いや、おいらが頭悪いのか（^| ^ ;  
）

くらいじい

## 個人授業

「あーあー。疲れたわ」

貸し出された政府公用車（目立つ国賓用ではなく、一般公用車）の中。

大統領との会合の後、俺はカーナビを頼りに、隊長に言われてこの国の議会施設へと車を走らせていた。

隊長は助手席で大きく伸びをした。

俺はハンドルを握り、横目で隊長の方を見やった。

「俺も、見てるだけで疲れましたよ。…あの殺伐とした空気」

「そうだったかしら？」

肩をすくめてとぼける隊長の姿は、何とも平和的だった。

さっきまで放っていた酷薄なオーラが嘘のように。

「とりあえず施設調査の許可は取ったわ。ノルマ達成ね」

「よく、あんな事ができますね」

俺はため息をついた。

フロントガラスの向こうで、街の灯りが下から上へと流れて行く。

でも、昔教科書で呼んだ「バブル」時代の日本の風景とは大分様変わりしていて、派手なネオンなどは殆ど見られなかった。

「こんなアウエーな状況で、周りをこの国のSPに囲まれてる中で

「そんな事」

隊長は一蹴した。

「SP?虚勢にごまかされてどうするの。現実を見なさい。仮に、私達があの場合で発砲もしくは何かの攻撃を受けたとするわよ。すぐに情報はWUやWUAに流れて、明日中にはこの国は灰になるわ」

「...そりゃ、そうかもしれませんが」

「大体、食料品も経済も全てWUからの援助に頼ってるくせに、いつまでも統合に応じない方がおかしいのよ」

「交渉は、進んでるんですか?」

隊長は、WUとこの国の統合会議にも出席している。

「あんまり。最高施政権の委譲や、移民の無条件受け入れとかで議論が平行線を辿っているわ」

最高施政権なんて言葉も、100年ほど昔まではそれほどメジャーじゃなかったしな。

W W U が各国の最高施政権を保持するようになるまで、普通は“施政権”というものは一つで、最高も最低もなかった。

それを受け入れると言っても、中々難しいものがあるだろうが、でも相手は所詮アジアの島国。

それも経済破綻一步手前の。

血も涙も無い W W U が手こずる理由がわからない。

そう思っていたら、隊長がまるで心を呼んでいるかのように言った。

「そりゃ、力で制圧するのは簡単だけど、何だかこの国に関しては少し危険な香りがするのよ」

「え、やっぱり核へ??？」

「そんなもの無いわ」

隊長が遮った。

「は？だってあの時……」

「さつき大統領に『核兵器を作っていると調査結果が出た』なんて言ったのは嘘。核兵器じゃなくて、何だか最近 W W U の加盟国のいくつかと秘密裏に連絡を取っているような素振りが見られるから、ちゃんとした事がわかるまで W W U 側もこの国の扱いを慎重にせざるを得ないって事よ」

「加盟国と連絡ですか……っていうか、無いんですか？核兵器」

さりげなく問題発言をする。

そんな困った得意技を發揮する隊長に、俺は突っ込みを入れた。

「当の大統領だってそんな事わかってるわ。あれは核兵器をネタに内部調査を了承させる為のいわば手続き。どうせW W Uには逆らえないのがわかってたから、大統領もあえて嘘だとか指摘しなかったのよ」

「そ、そうですね…」

思いもよらなかった。

しかし考えてみれば隊長は「信頼できる筋の調査結果が出ている」と言っただけで、どこかどうい筋かなど何も明らかにしていなかったのも確かだった。

つまり隊長は調査に向けての手続きを踏む為にハツタリをかまし、大統領は反論しても無駄に終わる事まで見越してあえて調査の許可を出した。

あの場で行われていた駆け引きの裏を、俺はそばで見ているながら把握する事が出来なかったのだ。

「…くそっ」

自分の未熟を思い知らされた悔しさに、俺は唇を噛んだ。

多分、隊長がわざわざ俺を大統領の所へ同行させた理由も…

「隊長は、このために俺を同行させたのでは？」

「んん？このため…っていうのは？」

「とぼけないでくださいよ。俺が未熟だから、こうして戒める為に行かせたんでしょ？」

「フフフツ。そんなに自分が前途有望な人材だっと思ってっているわけね。私がわざわざそんな個人授業みたいな真似をするほど…。なんだかんだで若いアルノ君はナルシストねえ」

「……………」

「冗談よ。そんな顔しないの。…前途有望に決まってるじゃない。なんせ、この私が自ら国際調査隊に引き抜いた逸材よ？…ラディ・アルノという男は」

## 個人授業（後書き）

停電休みで創作するとか料理するとかしかやる事ないわあ。

くれいじい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7972q/>

---

ALNO（アルノ）

2011年10月8日18時33分発行